論文　**Original Paper**

歴史的建造物に見られる国産大理石石材の調査
―日本橋三越本店―

乾　　睦　子*

Japanese building stone marbles in historic buildings：
Nihonbashi Mitsukoshi Main Store

Mutsuko Inui*

Abstract: Although marble is rarely quarried in Japan recently as building stone, several marble quarries are known to have been active in Japan until about the end of 1960's. Those marbles have been used for the interior finishing of many historic buildings in Japan, and some of them are still accessible for us to appreciate. This paper shows the results of the survey on the Japanese building stones used for the interior finishing in the Nihonbashi Mitsukoshi Main Store, Tokyo, Japan, which is one of the oldest department stores in Tokyo. Provenance of the building stones were identified visually and non-destructively: on-the-spot identification or identification using photographs. 10 or 11 types of stones (in product names) were identified as Japanese. Most of the identified stones were marbles and limestones except one that was serpentine. Those stones were presumably quarried in Tokushima, Kochi, Saitama, and Yamaguchi prefecuture, Japan. Department stores are frequently renovated that it was unclear what part is done when. Japanese marbles are mostly found as the floor, and around the stairs, lifts, and escalators. Stairs, lifts, and escalators have been installed before 1965, according to the architectural plan, which fits the time when Japanese marbles were quarried.

Key words:

1. はじめに

日本では，国内で大理石の建築石材が産業的に採掘されていた時代は明治時代末期から昭和時代中期までのごく限られた時代においてである。現在はほとんど採掘されていない（石文社，2004など）ため，当時首都圏で建てられた歴史的建造物に国産の大理石が使われていることはあまり知られていない。国内でどのような大理石が採掘されていたのかについても，その産地や産出時期，色・柄などの基礎的な知識が既に消えかけているのが現状である。日本の地質資源のひとつとして石材があり，近代のまちづくりに貢献した（全国石材工業会，1965）ことはひとつの産業史としてより広く知られてよいことである（乾，2016a；乾，2017）。

産業史の解明と並行して，実際に使用されている国産石材の外観，特徴などについてできるだけ多く記録を残すことが急務であると考えられる。近代建築物の多くが改修や解体の時期を迎えつつあり，国産の石材を正しく同定できるようにしておくことが，石材の記録が残っていない歴史的建造物を正しく評価することに寄与すると思われるからである。この目的で，筆者らは首都圏の近代建築物の石材調査を少しずつ進めているところである（e.g., 乾・北原，2009；乾，2013；乾，2016b）。本稿は，日本橋三越本店本館の内装に見ることができる主に大理石の石材を目視または写真で鑑定し（矢橋，2009；安藤，2013），その中で国産と考えられるものを報告するものである。また，店舗として使われる建物の特徴として，公の建築物とは異なる基準で石材が選定されていた可能性や，修改築の頻度が非常に高いこと，その中でも修改築の頻度が低い箇所に古い石材が残りやすいことなどが分かったのでその特徴を整理した。

2. 日本橋三越本店の建物について

日本橋三越本店本館の建物概要を**表1**に示す。三越本社（2005）等によると，1914年（大正3年）に竣工し，1920年（大正9年）の増築の後，1923年（大正12年）の関東大震災で大きな被害を受けた。その修築増築が

* 国士舘大学 理工学部
School of Science and Engineering, Kokushikan University

表1　日本橋三越本店の建物の概要と歴史

建物の主な増修築改修と関連する出来事など。三越本社（2005），渋谷（2017）等による。

日本橋三越本店の概要		
所在地：中央区日本橋室町一丁目4番1号 設計者：横河工務所（横河民輔、中村傳治） 構造・規模：SRC 造，地上 7 階，地下 3 階		
西暦（元号）	**建物に関する出来事**	**備考**
1914（大正 3）	本店新館（東館）完成	地下 1 階，地上 5 階 正面入口にライオン像 日本の建築物最初のエスカレーター
1921（大正 10）	本店西館増築完成	地上 7 階 関東大震災直前の形ができた
1923（大正 12）	関東大震災により本店全焼	ライオン像の台座が大きく欠けた写真あり
1924（大正 13）～	東館・西館修築の開始	この頃，床が大理石と寄木張りとなり下足預りを廃止したとの記述あり
1927（昭和 2）	全館修築完成	
1932（昭和 7）	地下鉄三越前駅開業	
1935（昭和 10）	本店全館増築改修完成	地下 2 階，地上 7 階，ほぼ現在と同規模 中央ホール完成
1941（昭和 16）		戦時にライオン像を供出したとの記述あり
1950（昭和 25）	供出していた 4～6 階売場返還	蛍光灯使用開始 ライオン像が戦後見つかり戻されたとの記述あり
1956（昭和 31）～	数回に渡る増築の開始	
1964（昭和 39）		この頃までに敷地が現在の形になった
1965（昭和 40）		この時点の図で，東西エレベーター，エスカレーター，階段位置が現在とほぼ同じ B 階段は昭和 10 年の図から変わっていない可能性があるが，それ以外の階段は位置が変わったように見える
1973（昭和 48）	新館完成	
1987（昭和 62）～	全館リニューアル開始	
1999（平成 11）	「東京都選定歴史的建造物」に選定	
2008（平成 20）	免震工事完成	

1927年（昭和2年）に終わり，その後1935年（昭和10年）に現在の規模に近い形で完成した。この時に面積約400m^{2}の中央ホール（図1）がほぼ現在に近い位置と形でできたと考えられる。その後，1960年前後（昭和30年代）に増改築が続き，三越（2005）の平面図によると階段やエレベーターの位置はこの間に変更されている。1965年（昭和40年）の平面図で，建物の規模と，階段とエレベーター，エスカレーターの配置がほぼ現在と同じになったが，その後も改修等はあったことが記されている。1999年（平成11年）には東京都選定歴史的建造物に選定された。2008年（平成20年）までには営業を続けたまま免震工事が完了しており，2010年（平成22年）頃から外壁清掃工事を実施した。免震化したことにより，2011年（平成23年）3月11日の東北地方太平洋沖地震では揺れが非常に少なく抑えられた（渋谷，2017）。2016年には「我が国の百貨店建築の発展を象徴するものとして価値が高い」という理由から重要文化財に指定された。これを受けて前述の東京都選定歴史建造物への選定は解除され，2017年に新たに「特に景観上重要な歴史的建造物等」に選定された。現在の1階平面の概略を図2に示す。

3. 調査の方法

2009年3月に，日本橋三越本店の許可を得て写真撮影を伴う石材調査を実施した。また，2017年9月に関係者にヒアリング調査を行った（渋谷，2017）。石材の銘柄・産地を著者が目視により鑑定した他，写真撮影を行い後日専門家に写真鑑定を依頼した（矢橋，2009；安藤，2013）。写真が掲載されているカタログ資料（全国建築石材工業会，2003）や産出時期が分かる文献資料（矢橋大理石株式会社，1986）も参考にした。建物の石材そのものについて記録資料が無く，目視および写真を元に判断しているので本稿に記す鑑定結果はすべてが不確実な鑑定であると言えるが，煩雑さを避けるために本

図1　中央ホール。5階まで吹き抜けの大空間である。床の市松模様のベージュ色はイタリア産大理石「ペルリーノ・ロザート」，濃緑は埼玉県産蛇紋岩「貴蛇紋」，柱の赤色はフランス産大理石「ルージュ・ドゥ・ヴィトロール」である。3階以上の高欄の後ろに見えている柱は山口県産「白鷹」である。

表2　日本橋三越本店で見られる国産大理石一覧

目視および写真により国産大理石と鑑定しうるものは以下の通りである。なお，再結晶しているとは言えないものが多いため，学術的には「霰」「薄雲」を除くと大半が大理石ではなく石灰岩と呼ぶべきものであるほか，「長州オニックス」はオニックス（鍾乳石），「貴蛇紋」は蛇紋岩である。しかし，建築石材としてはこれらがすべて「大理石」と呼びならわされている

石材名	産地	色・柄の特徴	代表的な使用箇所
暁（あかつき）	高知県	紅がかったベージュ色に濃淡の脈状の模様	F 階段の腰壁
霰（あられ）	山口県	白く粗粒な大理石	1階フロア床，H 階段
淡雪（あわゆき）	徳島県	ベージュ色に黒と白の複雑な形の脈状の模様	エスカレーター付近の柱
薄雲（うすぐも）または新薄雲（しんうすぐも）	山口県	白く細粒な大理石，青灰色の筋状の模様	C 階段の腰壁
霞（かすみ）	山口県	ベージュ色～灰色で化石が多く見られる	A・B・C・F・G 階段の段石
貴蛇紋（きじゃもん）	埼玉県	濃緑色に白の脈	中央ホール床，2 階以上の北西側エレベーター
茶竜紋（ちゃりゅうもん）	徳島県	褐色に白や黄の脈状	1 階北西側エレベーター
長州オニックス	山口県	茶色の縞模様	2 階以上の北西側エレベーター
白鷹（はくたか）	山口県	淡ベージュ色の濃淡	A・B・G 階段の腰壁，3F 以上の中央ホールを囲む高欄・柱
時鳥（ほととぎす）	徳島県	茶竜紋と似るがより淡色	1 階北西側エレベーター，エスカレーター付近の柱

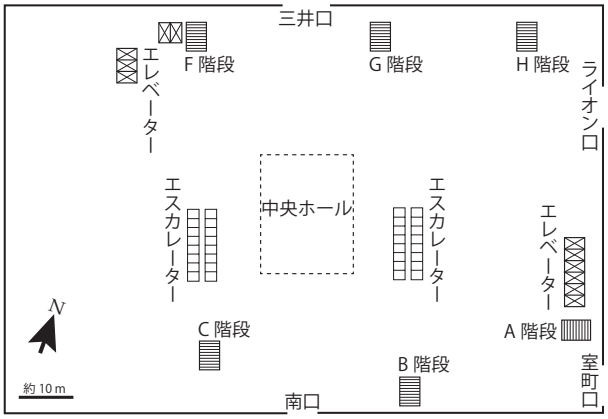

図2　日本橋三越本店1階平面の概略図。三越本店（2005）からトレース・改変。使われている大理石については表2を参照。

図3　1階フロアの床は山口県産の白大理石「霰」。肉眼で粒がよく見える粗粒の白大理石で，現在でも採掘が可能な銘柄である。H階段にも使われている。

文内では「？」等を用いずに記載した。

4. 日本橋三越本店の石材調査結果

国産大理石等と鑑定された石材の名前と産地の一覧を表 2 に示し，石材の写真を図 3 から図 12 に示した。

4-1　1 階フロアと中央ホール

1階フロアの床は白く粗粒の大理石（図 3）で，直径数mmの粒が肉眼で容易に認められる。山口県美祢市産の「霰（アラレ）」と思われる。これについては，産地においても日本橋三越本店に使われたという話を聞くことができた。山口県美祢市は多種多様な大理石を産した大産地であったが，現在も採掘可能なのはこの「霰」だけである。

中央ホール（図 1，図 4）は外国産大理石で豪華に装飾されているが，床の市松模様のうちの濃緑の石材は，埼玉県皆野町産の蛇紋岩「貴蛇紋」である。蛇紋岩石材のうち，白い脈が直線的にダイナミックに入っているタイプを「貴蛇紋」と呼んだとされている（図 4）。「貴蛇紋」は同じ建物の2階以上の床でも部分的に用いられて

いる。中央ホールに面する部分の上層階（3階以上）の柱には，山口県産の「白鷹」が用いられている（**図1**）。

エスカレーター付近に使われている大理石を**図5**に示した。ベージュ色の地に白と黒の脈が多く入る柄で，徳島県産の「淡雪」と思われる。「淡雪」は戦前から徳島県で産し，国会議事堂にも用いられた国産大理石の中でも代表的な銘柄である。ただし，同じ徳島県産で「新淡雪」と呼ばれた石材があった他，山口県でも同様の色柄のものが産し「残雪」「新淡雪」「淡雪」等と呼ばれていたことが分かっており，これらを外見から正確に区別することは困難である。矢橋大理石株式会社（1986）によれば，徳島県の「淡雪」は第二次世界大戦後の昭和23年頃に採掘が再開された一方，山口県の「新淡雪」（最初は「新淡雪」と呼ばれたものが後に「淡雪」に変わったとされている）の採掘は昭和43年頃からである。エスカレーター脇のこの箇所は昭和40年頃までに改修された可能性が高いので，現在のところは徳島県産の「淡雪」と推測するのが妥当である。

4-2　エレベーター付近

北西側のエレベーターの枠には国産と思われる大理石が用いられていた。1階北西側エレベーターの枠部分は，徳島県産「茶竜紋」または「時鳥」と思われる（**図6**，**7**）。いずれも淡褐色の地に白や黄色の脈が見られる石材で，ほぼ同じ場所から採掘されたもののうち，淡色のものが「時鳥」，濃色のものが「茶竜紋」と呼ばれた（矢橋，2009）。このエレベーター枠のうち一部がより淡色であることから，「時鳥」（**図6**）と「茶竜紋」（**図7**）の両方が分けて使われた可能性も考えられる。

北西側エレベーターのうち，北に面する2基については，2階以上の枠も国産石材で作られており，「長州オニックス」と「貴蛇紋」である（**図8**，**9**）。「長州オニ

図4　中央ホールの床の市松模様。濃緑の部分が埼玉県皆野町産の蛇紋岩「貴蛇紋」である。ベージュ色はイタリア産大理石「ペルリーノ・ロザート」。

図6　北西側エレベーターの1階部分（北面側）の枠。徳島県産の「時鳥」と考えられる。エレベーター扉上の白い部分はおそらく外国産のオニックスである。

図5　エレベーター付近に使われている「淡雪」。おそらく徳島県産。戦前から徳島県で産した銘柄であるが，昭和40年代頃に山口県でも同様の色柄のものが産し「残雪」「新淡雪」等と呼ばれていたことが分かっているため，この箇所の改修年代次第では産地が異なる可能性もある。

図7　北西側エレベーターの1階部分（西面側）の枠。徳島県産の「時鳥」または，多少濃い褐色なので徳島県産「茶竜紋」の可能性がある。

図8　北西側エレベーターの2階以上の北面側部分の枠は，山口県産「長州オニックス」と埼玉県産「貴蛇紋」である。

図9　北西側エレベーターの2階以上の枠の「長州オニックス」と「貴蛇紋」。「長州オニックス」は鍾乳石のようにできる縞模様が木目のように見えるのが特徴である。「貴蛇紋」は白い脈が直線状に入っているのが特徴である。

ックス」は山口県産の大理石で，鍾乳石のように作られた茶色の縞模様が特徴である。木目のように見えることが特徴である。「貴蛇紋」は中央ホールの床にも用いられている埼玉県産の蛇紋岩である。いずれも国会議事堂でも用いられている銘柄である。

4-3　階段

階段の腰壁や段石には国産の大理石が多く用いられていた。しかし，壁の一部が似た色柄の外国産大理石に置き換えられている箇所も多く見られ，近年の改修時には当初と同じ国産材が入手できなくなっていた様子がうかがえる。

階段の国産大理石と思われるものを図10～12に示した。図10は山口県産の「白鷹」である。複数の階段の

図10　階段の手すりに用いられている山口県産の「白鷹」。明るいベージュ色に濃淡の模様を持ち，山口県産大理石の代表的な銘柄のひとつであった。手前の床は1階フロアの「霰」。

図11　階段の手すりと腰壁が山口県産の「薄雲」と思われる。白く細粒で緻密な大理石で，青灰色の模様がある。階段の段石のベージュ色の石は山口県産の「霞」の可能性がある。

図12　高知県産「暁」と思われる階段の腰壁。地がわずかに淡紅色を帯びていることから「暁」と鑑定したが，「淡雪」にも似ている。

腰壁の他，中央ホールに面する柱にも多く用いられており（図1），当時は大量に産した代表的な銘柄であったことが推測できる。図11は山口県産の「薄雲」と思われる。同じ山口県産の白大理石「霰」と異なり，肉眼で簡単に粒が見えない程度に細粒で緻密である。白大理石の代表的な銘柄だったもので，他の建築物にも多く使われている。図11に見える階段の段石のベージュ色の石は，山口県産の「霞」の可能性がある。ベージュ～グレー系の山口県産大理石として代表的な銘柄であった。図12は高知県産の「暁」と鑑定した階段腰壁の石材である。徳島県産「淡雪」の地が少し淡紅色を帯びているようにも見え，「淡雪」である可能性もある。

5. 鑑定結果の考察および補足

建物内で，石材で仕上げられていたのは中央ホールの周囲と，階段やエレベーター周りが主であった。2節に述べた建物の歴史から，中央ホール付近は1935年の完成時に作られたものである可能性があり，階段やエレベーターの周囲は第二次世界大戦後～昭和40年にかけて改装された部分である可能性が高いことが分かる。この頃は国産大理石がまだ多く採掘されていた時期であるため（全国石材工業会，1965），目視等による鑑定で国産大理石と判断しても時期的に矛盾はないと言える。ただし，階段の一部は類似の色柄の外国産大理石に置き換えられていたことから，昭和40年代後半以降に改修された部分が多くあり，その頃には国産大理石が入手できなくなっていたことがうかがえる。

調査の過程で，三越のシンボルである正面入り口のライオン像の台座についても，宮城県唐桑半島の大理石が使われたという説があることが分かった。しかし，現在の台座は花崗岩であり，茨城県産とされる。唐桑半島の大理石が採掘されていた時期は関東大震災以前とされるため，大理石の台座は関東大震災の被害を受けて失われた可能性がある。花崗岩（主に外装に用いられた）に関しては本稿の取り扱う範囲外としたが，今後の継続的な調査が望まれる。

今回の調査から，商店の建築における石材利用の特徴を整理すると，まず官公庁やオフィス建築，私邸などと比べて頻繁に改修工事が行われることである。従って，改修の頻度が比較的低い床や，階段・エレベータ・エスカレータ周りに石材が使われ，また古い石材が残る可能性が高くなると考えられる。おそらく同じ理由から，中央ホールや構造上必要な柱にも古い石材が残っているように思われた。建物の用途上，廊下やマントルピース（一般には石材が使われる頻度が高い部位）を持たないのでそのような箇所への大理石利用はないことも特徴である。商店建築のもうひとつの特徴としては，頻繁な修改築とも関連するが，その時々の時代の流行や人々の気分がかなり影響したという点がある。それが重要文化財指定における解説文の「各時代において様々な集客のための仕組みを取り入れながら増改築を重ねており，我が国の百貨店建築の発展を象徴するものとして価値が高い」（文化庁，2016）という記述にも現れている。流行と同時に，石材を利用することの経済的合理性に関してもその時々でシビアに検討されたはずである。本稿では対象を国産大理石に絞ったが，昭和40年頃までの改修を最後に国産大理石の使用箇所がほとんど見られなくなったこともその表れと考えられる。

謝辞

本稿の石材鑑定は，矢橋修太郎（矢橋大理石株式会社）と安藤浩太朗（有限会社安藤石材）によっている。写真鑑定に協力いただいたと同時に，石材利用の歴史的経緯に関しても多くの解説・示唆をいただいたことを感謝する。写真撮影許可について，日本橋三越本店の関係者にご尽力いただき感謝する。特にヒアリング調査に関して時間を割いていただいた渋谷猛，大野良美および調査に関してご尽力いただいた梅津奈津（三氏ともに株式会社三越伊勢丹ホールディングス）には深く感謝する。著者がある程度の石材を目視鑑定できるようになるまでには，多くの他の関係者からの聞取り調査が必要不可欠であった。ここに名前を記さない多くの方々のご協力のお蔭であり，すべての関係者に深く感謝する。

参考文献

安藤浩太朗（2013）私信
乾睦子（2017）稲田花崗岩地域における採石産業の成立について，遺跡学研究 14，117-125.
乾睦子（2016a）山口県美祢地域における近代大理石産業の歴史と現状，国士舘大学理工学部紀要 9，71-76.
乾睦子（2016b）聖徳記念絵画館に使用された国産建築石材，月刊地球　号外 66，51-62.
乾睦子（2013）歴史的建造物に見られる国産建築石材の調査―東京都庭園美術館―，国士舘大学理工学部紀要 6，127-133.
乾睦子・北原翔（2009）日本の建築用大理石石材と産地の現状，地質学雑誌 115（1），I-II
渋谷猛（2017）私信
石文社（2004）「石材産業年鑑」
全国建築石材工業会（2003）「建築用石材総合カタログ　地球素材」
全国石材工業会（1965）「大理石・テラゾ五十年の歩み」
中央区平和記念バーチャルミュージアム（2015）「平成19年度企画展」http://www.city.chuo.lg.jp/heiwa/shiryo/kikaku/kikaku3.html
日本橋三越本店ウェブサイト（2015）http://mitsukoshi.mistore.jp/store/nihombashi/history/index.html
文化庁（2016）国宝・重要文化財（建造物）解説文　三越日本橋本店．国指定文化財等データベース
三井広報委員会ウェブサイト（2015）http://www.mitsuipr.com/
三越本社（2005）「株式会社三越100年の記録」三越
矢橋修太郎（2009）私信
矢橋大理石株式会社（1986）「石材　本邦産」